

日本語学校における研修のあり方の一考察

—— 現場の声を元に ——

阿曾村 陽 子

1. 概要

学生が自身で研修先としての日本語学校を見つけるのは、様々な点で難しい。しかし、日本語教育の現場を知らない学生にとって初めての日本語教育が教育実習となるのは多くの点で問題がある。そこで、希望する学生が行える、日本語学校での研修制度をつくった。本稿ではその研修を担当した教師と研修を受けた学生とにそれぞれアンケート調査を行い、現場での声を聞くことにした。すると、文法の知識の無さが問題のひとつであることがわかった。教育実習や研修に送り出す前に、大学側で身につけさせなければならない項目である。また、学生が自ら動き、研修先を見つけられるようにすることも、今後の課題であろうと考える。

キーワード 日本語教員養成 研修 模擬授業 教案

2. 日本語教員という仕事

2011 年は、3 月に東日本大震災が起こり、翌年は日本で日本語を学ぶ長期滞在外国人が激減した。¹ 震災前から日本語を学ぶ留学生は減少していたが、2012 年度、2013 年度が学生数の底であり、それから徐々にまた、留学生数は多くなっている。

¹ データは、日本語教育振興協会所属の日本語学校からのもの。日本語教育振興協会に所属している日本語学校は、全体の 8 割程度と言われている（webjapanese より）

そして、2008 年度に政府が出した留学生受け入れ 30 万人計画により、さまざまな国からの留学生が増え、さらに多様な形の日本語教育が、今以上に必要となっている。また、2020 年の東京オリンピックまでは、日本語を学ぶ非日本語母語話者も多い。このように、日本語教員は、天災や政策、世界情勢等の影響を少なからず受ける仕事であるといえる。

一方、日本語教員という職業は、その認知度が上がり、大学や専門学校等での養成機関も増えている。大学等の教育機関で指導するのみならず、企業での日本語教育や地域のボランティアでの日本語教育等、さまざまな形での日本語教育がある。単純に、日本における留学生が増えたことだけを考えても、政策や世界情勢等による多少の影響があったとしても、日本語教員という仕事は、今までと比較すると安定したものになるのではないかと想像できる。

3. 本学における日本語教員養成講座

本学には 30 年以上前から日本語教員養成講座があり、本講座を修了した学生から日本語教員を輩出している。本学における日本語教員養成講座は、理論のほか実践にも重きを置いており、2 年をかけて日本語教育の方法を学ぶカリキュラムとなっている。理論はすべて 2 年次からの履修であるが、実践を通して日本語教育を身につけるクラスは 1 年次から履修可能であり、² 近年、本学入学と同時に、実践を学ぶひとつめのクラス（以下、日本語教育概論）を履修する学生が約 80 % であるのに対し、2 年次で初めて履修する学生は 20 % 程度となっている。年度によって多少の誤差はあるものの、本カリキュラムになって以降、その傾向は変わらない。それは、日本語教員を将来の職業として望み、日本語教員の勉強ができる大学に入学する学生が徐々に³ 増加してきていることが関係しているといっていだろう。実際に本学の 1 年次で本講座を履修する学生の多くが、日本語教員を大学

² 2008 年度以降

³ 2005 年度以降

卒業後の進路と考えている事実がある。大学としては、日本語教員養成講座が開講されていることから本学を選択した学生の意欲にこたえるべく、授業を行い、日本語教員になるための学生の力をつける必要がある。筆者の担当は、実践の力をつける2クラスである。まず、1年目に履修する日本語教育概論クラスでは、主に日本語初級クラスの指導法とその教案の書き方を学ぶ。そして、そのクラスの単位を取得した者だけが、4年次になるまでに、次のクラス（以下、日本語教育方法論）において、主に日本語中級クラスの指導法およびその教案の書き方を学ぶこととなっている。それぞれのクラスで、各自作成した教案をもとに模擬授業を行う。より実践に近い形式で学ぶことで、具体的に「日本語教育とはどのようなものか」を知り、また、机上論で終わらせないことを心掛け、クラス展開をはかることとしている。

だが、本学の日本語教員養成講座においては、理論は2年次以上の履修となることから、学生は、例えるなら、標識もルールも学ばないまま一般道で車の運転の練習を行うことになる。そこで、筆者のクラスにおいて、さまざまな理論も同時に指導していかなければならない。さらに、履修する多くの学生が、日本で生まれ育ち、日本で日本語を用いた生活を送り、日本語で教育を受けてきていることから、日本語教育というものを知る機会がないという。一方で、自身の通っていた中学や高校で、日本語が使えない同級生が数名存在し、その友達のサポートをするうちに、日本語教育という存在を知り、興味を持ったという学生もいる。同じ学校に非日本語母語話者がいたというケースは、ヒヤリングの結果からも年々増えている。つまり、日本の中学および高校で、⁴ 非日本語母語話者が増加しているのだ。このように日本語教員をめざす学生の背景がさまざまであることは、時代の流れといってい

4. 教室外での日本人学生と留学生との交流

しかし、多くの履修者が、留学生や非日本語母語話者と出会い話すこともないた

⁴ www.bunka.go.jp/pdf/shisaku03

め、日本語教育とはなにかを知らず、さらには、留学生に対するイメージも知識も固定化しており、日本語教育の必要性が具体的に見えず、また、日本語教育とはどのような環境で行われ、そのために日本語教員は何をしなければならないかということがまったくわからない状態のままスタートすることになる。そこで、本学において日本語教員養成講座を履修する学生と、本学の留学生および交換留学生との交流会をセッティングし、年に数回、日本語で会話をする機会を設けている。留学生にとっては、日本人学生と話したり知り合いになったりするチャンスとなる。日本語教員養成講座を履修している学生にとっては、実際の留学生と会話することで、日本語非母語話者に対し、言語レベルのみにとどまらず、日本の文化や習慣について、どのように話せば自分の意図していることが伝えられるか、すべてが自身の経験となる。また、教育実習はもちろん、教案作成をする際に対象学生をイメージすることも可能となることから、「単位獲得のための授業の中で行う模擬授業」ではなく、より現実的な教案となり模擬授業を行うことにつながった。さらに、授業で必要な、「話を続ける」スキルも身につけることができる場としてほしいという筆者の願いがあった。しかし、交流会に行く留学生と日本語教員養成講座を履修している学生とを比較すると、圧倒的に前者のほうが人数が多く、会話を回しながら、多くの留学生と交流をはかることは難しかったとこたえる学生もいたが、さまざまな学びにつながる時間にはなったようである。

だが、それだけでは学生同士の90分程度の会話の時間で終わってしまう。いずれ日本語が指導できるようになるためには、留学生と交流の機会を持ち、さらなる留学生への理解が必要である。また、繰り返しになるが、日本語教育を受けたことのない学生が多い現状で、交流会を行ったとしても、「日本語教育とは何をするのか」という根本的な彼らの疑問に、答えることはできていないと考えた。そこで、筆者は、日本語教育概論、および日本語教育方法論を担当することになり実際に日本語教員を目指す学生と接するようになってから、いくつかの日本語学校および専門学校に、研修制度の依頼を行った。日本語教育の現場を知ること、これから自分は何を学び、身につけていく必要があるのかを自ら考えること、それが可能なのは、

現場での経験が不可欠だと考えたのだ。先方の留学生にとっても益のある研修になるためには、当該学校の教員に、指導内容や指導担当者等を委ねることとなるため、時機を見て、という返事となった学校も数校あるが、その中で、2つの日本語学校が、研修あるいは、研修のような形式で、本学の学生を受け入れてくれることとなった。

5. 日本語教員養成の主意

日本語教員養成講座において、筆者は、学生がどのような国、機関に赴いても、また、対象がどのような年齢であっても対応ができるような教え方の指導を行っている。例えば、日本語教育に必要な絵カードは、多くの日本語学校等の機関に市販されているものがあってそれを使えたり、CD やカセットテープ等の再生機器があったり、タブレットやパソコン等が常に使用できる環境にあったり、というのが、一般的な日本語学校の設備であろうかと思われる。しかし、それらがこれから日本語教員となる学生の「当たり前」となってはいけない。日本を離れ、電気の供給が不安定な地で日本語を教えたいと望んでいるという学生もいる。また、日本語教育で一般的に多く使用されている機器等があると聞いていたが、実際に任地に赴いたところ、さまざまな事情で、それらが使用できないケースもある。ボランティアで地域の施設等を利用して行う日本語教育では、自作の教材教具等が必要となる。日本語教育で一般に多く使用されている教材教具やさまざまな機器がそろい、常に万全の環境で日本語教育ができるという想定のもとで教員養成を行うと、受講生の将来の夢である日本語教員としてのさまざまな意味での可能性や選択の幅を狭めてしまうことになる。そこで、最初からすべてが整っている環境があるという前提で学生はただ教案を書き模擬授業に取り組むのではなく、日本語教育の方法を知るために、教案を含め、すべて自分で作成する経験を積むクラスとして、日本語教育概論および日本語教育方法論の授業を進めていった。例えば、絵カード作成には、教室の広さや学生の人数から考えてどの程度の大きさの紙が適しているか、絵や文字の

太さはどのくらいのものがあるのか、色は使うか否か、どのように見せれば効果的か、また、紙媒体の場合は、どのような紙の厚さが適しているのか、貼れる形にするには何を準備すればいいのかなど、さまざまなことを考えながら準備、作成をして初めてわかることがある。模擬授業の最中あるいは終了後に気づくこともあるだろう。事前指導で筆者もコメントはするものの、いずれの段階であっても、自らが作成し、使用することでしか得られない気づきがある。教案作成の段階から自作の絵カードやフラッシュカード等の利用の仕方もイメージし、模擬授業を行って、そのプランが正しかったか、また自分の思い描いたとおりに進めることができたかを振り返ることで、次へのステップへとつながるのだ。

また、このテクニックを習得すると同時に、筆者のクラスでは、自分を知るための時間とした。自分は、他人の前に立って緊張したときに、どのようになるのか、早口になるのか、声が小さくなるのかなど、自分のパフォーマンスがどのようなものであるのかを自分で知る機会としたのだ。さらに、仲間の模擬授業を見ることで、他人のいいところを瞬時に見抜くトレーニングも行った。友達の模擬授業のいいところを見つけるだけでなく、友達の発表のいいところは模倣していいこととした。自分なりの方法や意図を持っての模倣であれば、必ず本人なりの意思が含まれており、それはやがて自分のものになるからだ。

もう一点、すべてを自分の手で作成するのには、大きな理由が挙げられる。教育実習前の日本語学校における授業見学の際、学生各自で、その授業の教員から学ぶべき点を見つけられることが大切なのだ。授業の進め方はもちろん、語彙の使い方、教材教具の提示のタイミング、雑談の仕方など、細部にいたるまで、すべてが勉強になる。学生自身が見学前に模擬授業を行い、必要な教材教具を自身で準備するという経験を通して、日本語教育を理解できていることで、初めて、現場の方法を見ることが学びと気づきにつながるのである。

6. 研修制度導入理由

現在、インターンシップ制度を設けている企業も多い。また、アルバイトという形で、学生時代にさまざまな職種を体験することも可能である。しかし、日本語教員は、自身が受けた経験がないことから現場を知らず、大学内で行う模擬授業以外の業務が把握できていないため、教育実習にいくまで未知の仕事であるといえる。また、日本語教員という職業にあこがれの気持ちを抱いていたり、昨今みられる日本語教員関連の雑誌や漫画等の、興味をかきたてられる箇所を読んで関心を持ち、それが日本語教員の仕事のすべてだと思っていたりする学生が、教育実習に行って初めて現実をみて、自分には向いていないと落胆することもある。教育実習と就職活動の時期はおおむね重なる。あるいは教育実習が夏休み中に行われることもあるため、実習に行き自分は向いていないと初めて認識をしても、それから就職活動に向けて準備をするには周囲に後れをとってしまうだけではなく、好機を逃す可能性も高い。もちろん、日本語教員を目指す学生一人一人が、日本語学校での研修を希望すべく、各自でアプライできるのであれば望ましいが、その方法もわからない学生は多い。それ以前に、研修を認めてくれる日本語学校をどのように探せばいいのか考えあぐねているうちに、研修のタイミングを逃してしまったという過去がある。そこで、研修あるいは研修のような形で、教育実習前の学生を受け入れてくれる日本語学校に依頼することにした。しかし、研修は必須ではない。もちろん、さまざまな面から考え、教育実習が初めての現場体験となるのはリスクを伴うが、大学の単位とも無関係であり、研修はあくまで任意である。研修対象は、基本的に日本語教育方法論を取り始めた学年あるいは3年次である。これは、日本語学校からの要望であるが、日本語教育に関する多少の知識を得た学年であり、筆者も妥当だと考える。

7. アンケート調査結果および考察

今回行ったアンケートは、学生の研修先として受け入れを許可して下さった日本語学校と、実際に研修を行ったことのある、あるいは現在行っている学生に協力を得た。しかし、研修という制度を確立してさほど年月が経っていないことと、研修先として今回アンケート結果が得られた日本語学校が1校であることから、さまざまな学校のさまざまな教員からの意見をまとめたものにはならなかった。だが、研修先の担当者の意思がわかる初めての調査である。また、本学における日本語教員養成講座を履修している学生が受けている研修と、そこにかかわる筆者の授業の在り方の分析は、多少なりとも可能であろうと考える。以下は、「研修」を「将来の職業として日本語教師を希望している人への研修」と定義し、行ったアンケート調査の考察対象とすべき項目と回答および考察である。なお、アンケートの文言は太字で示してある。

①貴校における研修とはどのようなものか、また、今までどんな研修を行ったか

研修生が実際に行った研修のうち、まず授業見学が挙げられる。初級クラスを中心に見学をしたことがわかる結果であった。初級クラスだけではなく、中級クラスの見学をさせてもらった学生もいた。それぞれのクラスを複数回見学している。大学の授業でも、中級クラスの教案の書き方を学んでおり、回答者は日本語教育方法論を半年履修した段階での見学であることを考えると、研修生にとっては現場を知る最もいい時間となっただけではなく、学びも多いことは想像に難くない。また会話クラスの見学の機会もあったことから、スキル科目クラスも知ることができたようだ。その他、会話クラスのパートナーとなったり、教員が授業に必要なプリントの印刷を行ったりと、見学のみではなく、教室での活動や、教員の授業準備の手伝いをする機会を得る時間もあることがわかる。さらに、研修生も参加が可能な勉強

会が開かれた。内容は、テキストや N 2 の文法分析、JLPT・EJU・進学についての説明、EJU 記述の仕方等、多岐にわたっている。また、事務的处理等、学校の業務に関する説明も行われており、授業と事務処理の両面からさまざまな形で研修をさせてもらっていることがわかる。

②研修期間はどのくらいがいいと考えるか

特筆すべきは、研修生は 1 回 3 時間程度を望ましいと考えているのに対し、研修生を受け入れる日本語学校の教員は 6 時間程度と考えている点である。研修生の多くは、大学の授業の前あるいは授業後に日本語学校へ行き、研修を受けている。その時間が 3 時間であることから、経験に即して回答をしたものと類推できる。さらに、その経験の時間を望ましいと考えているということは、すでにその 3 時間で多くを学んでいると感じているということだろう。一方、研修生を受け入れ指導をしている側は、3 時間では不十分だと感じていると考えられる。研修内容にもよるが、たしかに、3 時間では授業見学のみで終わってしまうこともあろう。日本語学校の現場を実際に経験するにはあまりにも短い時間であると言わざるを得ない。現場の教員が 6 時間を理想と考えるのであれば、研修生も、自分の大学の授業に負担のない程度に、6 時間の研修を行わせてもらうことがいいのではないだろうか。

③研修のタイミングはいつがいいか

研修生、受け入れ教員の計で最も多かったのが、「教案の書き方がわかり、本人も書けるようになってから」であった。また、「教員養成の勉強を始めて半分くらいたったころ」を選択した研修生も複数見られた。ここでの「半分」とは、日本語教育概論を終えたころ、つまり、初級クラスの教案が書けるようになったころと考

えていいだろう。大学での実習関連科目が、そのようなカリキュラムになっているからだ。少数意見としては、「本人がやりたいタイミングならいつでも」も挙げられていた。また、「養成の実習が終了していれば」というコメントも見られた。これは、研修生と受け入れ側とでの意見の相違ではなく、個々人の考えによる相違がみられた結果のように感じる。

⑤研修生に参加して困ったこと / 研修生を受け入れて困ったこと

研修生からの回答で最も多かったのが、「機械の使い方がわからない」であった。それらをどのように解決したのか、本アンケートからはわからないが、わからないものをそのままにせず、極力研修先の教職員の仕事を遮らないよう配慮しながらたずねるように、と、筆者の授業でコメントをしてきたことではある。過去に、同様のコメントを、研修を経験した学生から聞いたことがある。教職員に機械の使い方を聞くのは恥ずかしく、自己判断で使用し、その結果、叱責を受けたという。過去の例をふまえ、機械の使い方がわからない場合は、躊躇せず、現場の教職員に質問するよう、指導することとしている。

また、「教員とコミュニケーションが取れない」「指導教官の指示が理解できない」という回答もあった。具体的な内容が記載されていなかったのだが、研修生は、何を教員とのコミュニケーションと考えていたのだろうか。研修は研修生のための時間だが、その場は、日本語を学ぶために通っている留学生のための学校である。研修とは、研修先の教職員からなにかが与えられるのを待つのではなく、自らが学ぶために積極的に動き、必要に応じて現場の教職員にコミュニケーションをとっていくものであると考える。初めて目にする現場の多忙さに臆したのかもしれないが、いずれの場合であっても、現在も継続中の研修においては、すでに解決されている問題であってほしいと願う。

「指導教官の指示が理解できない」というコメントは、教員側からの回答とも関

わっているのではないかと想像できる。教員側からは、「時間を守らない」「基本的な知識がない」の2つが挙げられていた。まず、指導教官の指示が理解できないというのは、基本的な知識がないことから起こるのではないだろうか。「て形の作り方、動詞のグループが理解できない」というコメントがあったことを考えても、指導教官の指示を理解するために必要な語彙や知識が定着していないのではないかと想像できる。教員からは、「養成講座は何を教えているのか？と思う場合がある」とのコメントもあり、研修を受けるレベルに達していない研修生も少なからず存在するということになる。また、時間を守らない研修生についても具体的なことはわからないが、教員とコミュニケーションをとる方法や、時間の厳守について、研修に送り出す側として、どこまで事前に指導をする必要があるのかと考えさせられる回答であった。

さらに、「学校固有の指導方針があるためか、大学で指導されたことと反対のことを指導された点が少しあった」ことを「困ったこと」として挙げた研修生がいた。大学では、先に述べたように、どのような環境においても日本語教育ができるような教員を養成することを心掛けている。そのため、そのやり方が、ある機関や組織にはあてはまらない可能性もあり、その際には、先の方針にそった進め方をするように指導している。だが、2年間かけて身につけたものが研修先で使えない場合、戸惑うのはやむをえないのかもしれない。筆者の指導の意図を、今以上に明確にする必要があることを知るきっかけとなる回答であった。

⑥日本語教師になる前の研修は、あった方がいいか否か また、その理由

研修生、受け入れ側ともにすべての回答者が「1. あった方がいい」を選択していた。現場の様子がわかる、自分の課題の発見につながる、即戦力の育成につながる等がその理由として挙げられている。研修を通して多くを学ぶ機会としてほしいと願っていたことから、研修の存在に否定的な回答がなかったことは、安堵の結果

だったといえる。

⑦研修を受ける時点で研修生が身につけておくべき内容、心構え、大学側に対する要望等、ご自由にお書きください

研修生の回答

- ・「日本語における似た意味の言葉の違いを説明できること。日本語に対する興味や関心を常に持ち続けること」
- ・「研修校の体制、方針」
- ・「日本語教育に関する基礎知識（品詞の呼称、動詞のグループ分け）について最低限知っていたほうがより実り多き研修になるのではないか」

大学側に対する要望として

- ・「日本語学校で指導経験のある教員との座談会」

受け入れ側の回答

- ・「文法の分析方法→これは日本語学校が教授することかと疑問に思う」

- ・「日本語における似た意味の言葉の違いを説明できること。日本語に対する興味や関心を常に持ち続けること」

模擬授業や筆者の授業では、ある言葉を他の表現で置き換えることも行っている。辞書のようにある言葉を他の言葉で置き換えて説明するのではなく、似た表現を並べて、留学生の理解の助けとなるようにするのである。例えば、「私は納豆が食べられません」を説明したいときには、既習の表現である「私は納豆を食べることができません」を提示するのである。これができるようになるには、どのような語彙や表現を留学生が既習であるかを知らなければならないことから、多くの場合、日本語教育の経験が必要である。ただ、筆者のクラスで学んだ日本語教育の文型を、

このように関連付けて理解し、日本語教育を行う方法があることを学んだ学生のコメントなのだろう。

・「研修校の体制、方針」

複数の日本語学校へ研修に行っている学生のコメントなのだと想像できる。研修校ごとに方針や日本語教育の方法、さまざまな指導等が異なるため、研修生はそれを理解する必要があることを示したいのだろう。これは、研修後、その日本語学校に勤務する際にはさらに必要な理解および認識となる。研修を、それぞれの日本語学校における今後の戦力となる新人の育成の場であると考え学校も多く、研修生が研修校の考え方を理解することは、大きな意味がある。

・「日本語教育に関する基礎知識（品詞の呼称、動詞のグループ分け）について最低限知っていたほうがより実り多き研修になるのではないか」

受け入れ側の回答

・「文法の分析方法→これは日本語学校が教授することかと疑問に思う」

これらふたつの回答は、同義ととらえていいだろう。本学における筆者の授業において、もっとも力を入れていることのひとつに、国語文法に関する理解と知識の定着が挙げられる。これらが備わらないと、日本語教育はできないからである。中学生までに学ぶ国語文法を理解し、応用が可能になるように指導するのであるが、文法に対する苦手意識を持っている学生や、古典文法と混同してしまっている学生もいる。また、大学で模擬授業もでき、単位も取得した学生が、研修先で文法に関する質問が出され、まったく答えることができなかったという話を聞いたことがある。筆者が話を聞いた同じ研修生の経験が受け入れ側の回答のきっかけとなったのかどうかはわかりかねるが、この回答は、本学における筆者の指導の仕方を省みるものとなった。文法を、苦手意識から解き、短期記憶に終わらせずに、定着させら

れるような指導方法を、再度考える必要がある。研修を行いたい学生は、基本的に筆者の推薦が必要である。学生が個人で日本語学校に研修の意を申し出ない限り、研修希望の旨を、筆者を経由して先方の日本語学校に伝える手順となっている。今後は、研修を希望する学生に、文法の理解度チェックを行い、それにパスした者のみを推薦すること等も考えなければならない。日本語教員養成科目を担当した当初から比較し、徐々に文法指導の時間を増やし、春学期のみの指導であったものを秋学期にも行い、また、日本語教育概論でだけ行っていた文法を、日本語教育方法論でも復習する時間を設けるようになったにもかかわらず、このような回答があるということは、非常に残念である。だが、文法については、たしかに日本語学校で指導すべきものではない。日本語教員養成の段階で定着させるものである。日本語学校で指導を行うことは、時間のロスなどという単純なものでは済まされない事象でもある。大学で研修生を指導している者として大きく反省すべき回答であった。

大学側に対する要望として

・「日本語学校で指導経験のある教員との座談会」

を挙げた研修生がいた。日本語学校の教員が大学の筆者の授業時間に来て、日本語学校とはどのようなところか等を説明する他、本学学生からの質問に答えてもらう時間を設けたことがある。座談会という形式ではなかったが、本学を卒業した現役の日本語学校の教員と直接話をする機会をつくることで、日本語教員をめざしている本学学生にとっては刺激になったものと思われる。可能な限り、継続していきたいと考えている。

学生が日本語学校に研修として学びに行き始めた当初は、研修先と研修生との関係に、筆者が入り込まないほうがいいのではないかと考え、数カ月一度、学生に、簡単に口頭で様子を聞く程度であった。しかし、研修中に生まれた問題点を相談する相手が見つけれず、一人で抱え込み、日本語教員を目指して本学に入学しながら、最終的には日本語教員以外の道を選ぶことを希望する学生も現れたことから、

筆者も多少の介入をすることで、研修に行っている学生からの相談を受けられる体制にした。また現場の様子を知ることが心掛けるようにした。しかし、それは口頭での報告であり、また、研修先への確認等を行ったわけではなかった。今回、本調査で得た回答は、より具体的で現実的なものであった。日本語学校の教員からの回答のいくつかは、筆者のみならず、本学の日本語教員養成講座担当者すべてが反省し、学生への指導をより徹底させる必要があると感じるものであった。

8. 今後の課題

今後は、以下の3つが大きな課題として挙げられる。

- ・日本語学校での研修に向けて、研修担当者と話し合い、事前に身につけておくべき事項を確認する
- ・年に数回行われる日本語学校合同説明会へ足を運ぶよう情報を提供する
- ・日本語学校を各自で探し、そこに研修を申し入れることができるよう、さまざまなサポートをする

学生が自ら動き、研修先を見つけられるようにすることも、今後の課題であろうと考える。ここ数年のことではあるが、合同説明会へ行き、多くの日本語学校の教職員から話を聞き、学生とその日本語学校とで今後を決めていくケースが徐々に増えているといえる。

現在、日本語教員の増員を考えている日本語学校は多い。研修から行うことで、学生とのつながりを深め、さまざまな条件が合った後に、大学卒業後、そのまま教員としての採用となる。それぞれの日本語学校の、日本語指導はもとより、一日の流れ、人間関係、仕事の方法等、研修を行った者はこれらを把握できており、日本語学校側も、新人教育を行う必要がなくなるというメリットがある。ただし、研修生として受け入れてもらう前に、研修生となる学生が、日本語教員として行すべき

ことを事前に知っておく必要があろう。また、文法等、日本語教員になるために必要な最低限の知識は持ち合わせることはいうまでもない。そのためにも、授業内での模擬授業の準備とその成功は、単位取得のためのものとするのではなく、日本語教員になりたい学生の手助けをするためのものとなるべきであろう。また、研修は、ひとつの日本語学校に多く通うことも、複数の日本語学校で行うことも、いずれもメリットがある。前者はその日本語学校のさまざまな業務の内容、方法を知り、早く仕事を覚えることも可能である。後者は、いろいろな日本語学校を知ることができることから、将来的に、就職先として、自分に合ったスタイルや考え方の学校を選ぶことができる。学生の授業外活動として負担にならないように、しかし将来を決める大きな準備の時間として有意義に過ごすことができるよう、教師としての確かなアドバイスをすることもひとつの仕事であろう。

将来の日本語教員を養成する本講座は、学生の人生にもかかわる重要な科目のひとつであるとする。常に真摯に学生と向き合い、研修先との情報交換をしながら、そのときの最高の選択となるべく寄り添える存在でありたいと考えている。

《謝辞》

本校執筆にあたり、MANABI 外語学院東京校の教員各位、また、研修を過去に受けた卒業生、それから現在研修を受けている学部学生みなさんにアンケート調査にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

《参考文献》

- ・阿曾村陽子（2016）「日本語教員養成講座受講者の模擬授業および教育実習に対する意識—アンケート調査から—」『二松学舎大学論集第 59 号』二松学舎大学
- ・阿曾村陽子（2017）「日本語教員養成課程における教育実習先との連携—実習担当者への聞き取りをもとに—」『二松学舎大学論集第 60 号』二松学舎大学
- ・外国人児童生徒等教育の現状と課題 文部科学省初等中等教育局国際教育課
www.bunka.go.jp>pdf>shisaku03
- ・資料 4 ポスト留学生 30 万人計画を見据えた留学生政策—文部科学省
www.mext.go.jp>afieldfile>2018/05/28

- ・日本語教育振興協会
日本語教育機関の調査・統計データ 日本語教育機関の概況（機関数・学生数の推移、進学者の内訳等）
<https://www.nisshinkyo.org/article/pdf/20180218s.gaikyo.pdf>
- ・日本語教育機関の法務省告示基準第 1 条第 1 項第 13 号に定める日本語教員の要件—文化庁
www.bunka.go.jp >…>日本語教育
- ・「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（二次報告案）」の日本語教師【初任】—文化庁
www.bunka.go.jp>…>意見募集
- ・「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」について | 文化庁
www.bunka.go.jp>…>報道発表
- ・留学生 30 万人計画 — Study in Japan
<https://www.studyjapan.go.jp/toj>
- ・webjapanese 日本語教育 日本語教育を考える
<https://webjapanese.com/blog/j/shiryoo/suii/>

アンケート用紙【研修担当者用】

【「研修」の定義】

☆研修を行う期間は、企業、機関、部署等によって様々であるが、日本語学校においては、大きく次の2つに大別できると考えられる。

- ・将来の職業として日本語教師を希望している人への研修
- ・日本語教師として採用した後、数ヶ月程度、各学校で行う研修

本稿での「研修」は、前者を指すこととし、また、本稿では前者における研修について言及する。

当てはまるものを一つ選んで下さい。「複数回答可」とあるものについては、複数を選んでください。

① 貴校における研修とはどのようなものか、また、今までどんな研修を行ったか（複数回答可）

1. 授業見学（レベル 時間等具体的に

例）初級コアレベルクラス 50分を3回 クラスの3分の2がベトナム人）

2. 会話クラスのパートナー

3. クラス内での教員の補助

具体的に→

4. 教員が授業に必要なプリントの印刷

5. 教員が授業に必要な絵カード・写真パネルの準備

6. 教員が授業に必要なプリントの作成およびその補助

7. 研修生が自ら企画した日本語や日本文化に関する授業の実施

8. 勉強会

内容を具体的に（例 テキスト分析）→

9. その他

具体的に→

② 研修期間はどのくらいがいいと考えるか

1. 週に一度3時間程度を1か月

2. 週に一度6時間程度を1か月

3. 週に二度 3 時間程度を 1 か月
4. 週に二度 6 時間程度を 1 か月
5. 週に一度 3 時間程度を 3 か月
6. 週に一度 6 時間程度を 3 か月
7. 週に二度 3 時間程度を 3 か月
8. 週に二度 6 時間程度を 3 か月
9. 週に一度 3 時間程度を 6 か月
10. 週に一度 6 時間程度を 6 か月
11. 週に二度 3 時間程度を 6 か月
12. 週に二度 6 時間程度を 6 か月
13. その他具体的に→ 週に 度を カ月

上記を妥当だと考える理由

③ 研修のタイミングはいつがいいか

1. 教員養成の勉強を始めたタイミング
2. 教員養成の勉強を始めて半分くらいたったころ
3. 教員養成の勉強が終わってから
4. 教案の書き方がわかり、本人も書けるようになってから
5. 本人がやりたいタイミングならいつでも
6. その他 具体的に→

上記を妥当だと考える理由

④ そもそも研修とはどのようなものか

1. 教員になるための準備、練習を行うもの
2. インターンシップ同様、日本語学校等、研修を行っている機関の業務を知ってもらうもの
3. その他 具体的に→

⑤ 研修生を受け入れて困ったこと（複数回答可）

1. 機械の使い方がわからない
2. 時間を守らない
3. 基本的な知識がない 具体的に→例） 1 グループ、 2 グループ、 3 グループの分け方がわからない
4. 学生とコミュニケーションが取れない
5. 日本語学校の教員とコミュニケーションが取れない
6. 他の研修生とコミュニケーションが取れない
7. 指導教官の指示に従わない
8. 困ったことはない
9. その他 具体的に→

⑥ 日本語教師になる前の研修は、あった方がいいか否か また、その理由

1. あった方がいい

理由

2. なくていい

理由

⑦ 研修を受ける時点で研修生が身につけておくべき内容、心構え、大学側に対する要望等、ご自由にお書きください

ありがとうございました

氏名

研修担当内容

研修担当歴あるいは回数

連絡先（メールアドレス等）

アンケート用紙【研修者用】

【「研修」の定義】

☆研修を行う期間は、企業、機関、部署等によって様々であるが、日本語学校においては、大きく次の2つに大別できると考えられる。

- ・将来の職業として日本語教師を希望している人への研修
- ・日本語教師として採用した後、数ヶ月程度、各学校で行う研修

本稿での「研修」は、前者を指すこととし、また、本稿では前者における研修について言及する。

当てはまるものを一つ選んで下さい。「複数回答可」とあるものについては、複数を選んでください。

① 実際に経験した研修はどのようなものか（複数回答可）

1. 授業見学（レベル 時間等具体的に

例）初級コアレベルクラス 50分を3回 クラスの3分の2がベトナム人）

2. 会話クラスのパートナー

3. クラス内での教員の補助

具体的に→

4. 教員が授業に必要なプリントの印刷

5. 教員が授業に必要な絵カード・写真パネルの準備

6. 教員が授業に必要なプリントの作成およびその補助

7. 研修生が自ら企画した日本語や日本文化に関する授業の実施

8. 勉強会

内容を具体的に（例 テキスト分析）→

9. その他

具体的に→

② 研修期間はどのくらいがいいと考えるか

1. 週に一度3時間程度を1か月
2. 週に一度6時間程度を1か月
3. 週に二度3時間程度を1か月
4. 週に二度6時間程度を1か月
5. 週に一度3時間程度を3か月
6. 週に一度6時間程度を3か月
7. 週に二度3時間程度を3か月
8. 週に二度6時間程度を3か月
9. 週に一度3時間程度を6か月
10. 週に一度6時間程度を6か月
11. 週に二度3時間程度を6か月
12. 週に二度6時間程度を6か月
13. その他具体的に→ 週に 度を か月

上記を妥当だと考える理由

③ 研修のタイミングはいつがいいか

1. 教員養成の勉強を始めたタイミング
2. 教員養成の勉強を始めて半分くらいたったころ
3. 教員養成の勉強が終わってから
4. 教案の書き方がわかり、本人も書けるようになってから
5. 本人がやりたいタイミングならいつでも
6. その他 具体的に→

上記を妥当だと考える理由

④ そもそも研修とはどのようなものか

1. 教員になるための準備、練習を行うもの
2. インターンシップ同様、日本語学校等、研修を行っている機関の業務を知ってもらうもの
3. その他 具体的に→

⑤ 研修に参加して困ったこと（複数回答可）

1. 機械の使い方がわからない
2. 自分が時間を守れない
3. 基本的な知識がない 具体的に→例） 1 グループ、2 グループ、3 グループの分け方がわからない
4. 学生とコミュニケーションが取れない
5. 日本語学校の教員とコミュニケーションが取れない
6. 他の研修生とコミュニケーションが取れない
7. 指導教官の指示が理解できないあるいは納得できない
できれば具体的に→
8. 困ったことはない
9. その他 具体的に→

⑥ 日本語教師になる前の研修は、あった方がいいか否か また、その理由

1. あった方がいい

理由

2. なくていい

理由

⑦ 研修を受ける時点で研修生が身につけておくべき内容、心構え、大学側に対する要望等、ご自由にお書きください

ありがとうございました

氏名

研修先

研修歴あるいはおおよその回数

研修に行った学年

日本語教員養成講座の日本語教育概論および日本語教育方法論を何年生の時に履修したか

☆上記については、内容がわかれば形式は問いません。自由な形式でお書きください。

連絡先（メールアドレス等）